

^{つばきおかみやしろ}

椿大神社のことを取り上げる。

伊勢の国一の宮椿大神社（祭神は猿田彦大神・天鈿女命／^{あめのうずめ}三重県鈴鹿市山本町）の事例である。当時の宮司山本行隆氏著書「椿大神社二千年史（たま出版）」の中から要約する。

「・・・奈良・平安の神仏混淆時代、同社境内には神宮寺といわれる別当寺六か寺が併設されていた。天正の頃、織田の兵火で神社と寺は悉く焼かれ 400 人もの社僧が焼死した。」（このような歴史を憂いていた同山本宮司は、昭和の大造営の中で次のようなことを成し遂げました。まずは、次のようなこととお話されています。）

・・・私は神道、仏教といった狭い枠に閉じこもらないで、焼死した 4 百人以上の僧の霊を慰めなければならなかったと考えた。神社に仏を祀るお堂を造ると言うのは奇妙に聞こえるが、生前仏教僧として活躍した人には仏教に基づく祭り方をしなければならない。・・・

- その別当寺跡地にそれらの無縁仏供養のために多宝塔を建立し、盛大な清め祓いと開眼御霊祭を挙行した。
- 昔の六か寺に祭られていた 6 体の仏像の内、1 年 1 体ずつ四年がかりで、大日如来、十一面観世音菩薩、薬師如来、不動明王の 4 体を刻んで「行満堂（神道の慰霊殿）」に奉安し、法華経と般若心経を読経して霊を慰めた。
- **神社本庁からは、神社に仏像を祭ったと言うので調査に来たが、事情を説明して納得してもらった。・・・」**

神社境内の神殿に仏殿（行満堂）を併設した。まさに、現代版神宮寺（別当寺）の復興・再現であります。神社本庁の調査におけるその指導的意向に反対し、逆に説得を試みるなどと言うことは、一般の神社関係者の中で他にいるものだろうか。これもすごいと思う、この内容に接し、感激・感動して心身ともに震える思いがした。なお、別記したが、出羽三山神社の霊祭殿に対応する姿勢にも酷似している。

そこで確かめたく、2014(平成 26)年 5 月 16 日(金)同神社（三重県鈴鹿市）に参拝に行ってきた。普通の神社だが、広大な境内敷地を持ち、図－14 が拝殿、図－15a が行満堂、図－15b がその内部。祀られている仏像は阿弥陀如来を加えて 5 体になっていた。神像としての聖徳太子像も加え、中央の行満大明神と共に全部で 7 体が混在して祀られていた。まさに神仏同座の聖域そのものであった。置かれていた儀式の道具を見ると、右端には幣、中央には^{ぬさ}三宝・神境、左端に焼香箱が置かれており、神仏を合せた作りとなっていた。この仏殿（行満堂）に専属の住職がいる訳ではなく神社の直営なのである。つまり神官（神職）が仏事の儀式を以ってお勤めを行っていた、つまり、神官が仏式祭祀を日常的に齎行している、私が行った時に説明をして下さった方は、まさしく装束が神官の姿であった、心底から感激した。この神仏像の 7 体についてはこの神官から説明を頂戴した。



図－14



図－15a



図－15b

(end)